

黒田藩



疋田ひきた

一族悲話



疋田親子の墓

江戸時代初め、2代目黒田藩主黒田忠之と家老栗山大膳の争い、いわゆる黒田騒動は世に知られているが、その波紋は尾を引いて後に別の事件となり、折尾にいた藩士疋田小三次とその子3人が藩命で誅殺された。何の罪もなくして犠牲となった親子の悲劇は、今も人の心を打つ。

脱藩をめぐる惨劇

疋田小三次は黒田官兵衛、長政親子の忠臣で黒崎城を預かった井上周防守之房の子、半右衛門正友の家臣。八幡市史などによると、半右衛門は藩主忠之と争った栗山大膳の娘を側室としていたことなどから忠之から疎まれ、藩を離れた。半右衛門の子(弟、甥との説もある)忠三郎も離藩しようとしたが彼を小姓としていた忠之が許さず、脱藩を決意。ここで小三次

が先導役として東隣の豊前小笠原藩領への脱藩を手助けした。怒った忠之は小三次を拷問にかけ、忠三郎の行方などをたどしたが小三次は口を割らず、藩は小三次が隠していた幼い男児3人も探し出し、無残にも共に処刑した。承応元年(1652年)(承応2年との説もある)のことだった。

JR折尾駅に近い東筑2丁目の正願寺裏手に、自然石に「安信全忠居士」「吟哲童子」「露吟童子」「梅吟童子」と刻まれた4基の墓が並んでいる。小三次と3人の男児のもので、左側には小三次の遺品が収められていると言われる古井戸が石蓋をかぶって残されているが、とりわけ、童子の墓石が痛ましい。

その童子について地元には、疋田小三次の家臣が自らの子を3人の童子のうち1人の身代わりに出した。生き残った実の子は元服後、



巨石に覆われた古井戸

元の疋田姓に戻った、との説が伝わっている。また男児のほか生後2ヶ月ほどの女児もいて、こちらは大蔵の地(現八幡東区)に匿われて無事に成長した。今、折尾と八幡東に疋田姓の人が多いのはその縁からという。折尾には明暦年間(1655~1657)、地元村民が武士の心根を貫いた小三次をたたえ、また、たたりを恐れてその霊を祀った菅原神社がある。折尾の一族の女性は「親類縁者10軒ぐらいあり、当番制で毎年春と秋、お参りします」と話す。

◆北九州歴史文化塾◆

江戸時代初期の黒田藩2代目藩主時代、折尾の一部を領していた疋田小三次は黒崎城主井上周防の縁者の脱藩を手助けしたことを藩主にとがめられ、罪もない我が子3人と共に処刑されました。中村さんに話を聞き、親子を偲ぶ史跡や堀川一帯を巡ります。

《参加申し込み・お問い合わせ》

さくら編集部

0965-6080

テーマ 「黒田藩疋田一族悲話」
開催日時 4月13日 午後1時～
集合場所 JR折尾駅東口(八幡西区)
講師 中村恭子堀川再生の会 五平太会長
受講料 500円

大身家臣整理の犠牲か

黒田騒動は2代目藩主忠之の暗君ぶりが主因とされる。疋田親子の悲劇も同様だが、北九州市立自然史・歴史博物館の守友隆学芸員



疋田小三次の霊を祀る菅原神社

は「暗君という単純なことだけではなく、黒田家が藩主の地位を確立していく過程で、1万6千石の大身の家臣を整理していく狙いがあったのではないか。疋田親子はその犠牲ともいえる」と話す。また折尾の文化、地域活性化活動に取り組む中村恭子さん(堀川再生の会・五平太会長)は「今、その悲劇、歴史を知る人が地元でも少なくなっている。史跡も放置されている。もったいない。今、その歴史を見直し、町おこしにもつなぐことができないか」と話している。

シニアスタッフ 村田和夫

※1井上周防守之房(1554~1634)黒田官兵衛の父の代から黒田家に仕える重臣で、黒田二十四騎の一人。筑前入国後、1万6000石を与えられ豊前との国境を守る黒崎城代になった。



疋田親子の墓地

東筑2丁目、正願寺南側に隣接
折尾駅東口より徒歩約6分
(600m)

菅原神社

堀川町の折尾愛真短大の右横
折尾駅西口より徒歩約5分
(350m)